
戯れ

紅波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戯れ

【Nコード】

N7859E

【作者名】

紅波

【あらすじ】

雨の日の探偵団——しりとりに加わった実質年齢17才&18才のお話し。コ哀あまあまです。

(前書き)

はじめまして紅波といいます！新志コ哀でサイトをひらいてるので
そちらにもどうぞ！ Beat up her! : h t

t p : / m - p e . t v / u / p a g e . p h p ? u i d = p e
c k u 3 u & a m p . i d = 1

「オムライス！」

「すずめ!!」

「め、め、…メダカ！」

「かー？あゝ…か、か、あ！釜飯！」

今日も今日とて少年探偵団は賑やかだ。

梅雨で雨が連日しとすと降りしきる中、雨傘を並べて差して帰り道を進んでいる。

パソコンだテレビゲームだの子供の発育環境が問題になっている今のご時世に、しりとりという古典的な遊びとはよくやるもんだと、おおそ小学生らしくない事を考えながら、江戸川コナンは楽しげにはしゃぐ三人のひとつ後ろを歩く。実際中身は高校生なのだから当然ではあるが。

ふと視線を横に向けると、赤茶けた髪を掻き上げながら欠伸をしている灰原哀と目が合う。猫毛の髪の毛は季節も災いしてか何時もよりくせが強くなって本人はここ最近至って不機嫌だ。

「…なによ？」

「や、別に」

その不機嫌を隠しもせず片眉を上げて問った彼女に曖昧な返事を返した。

前方では未だしりとりが続いている。コナンの視線の先に気づいたのか、哀はくすりと笑うと、飽きないのかしらねと目を細めた。

「い、いゝ…いくら井！って、ゲー！」

「ああー！！元太くんの負けー！」

「イクラでやめとけばよかったのになんで井まで着けちゃいますかねー」

「うー…だって食いたかったんだもんよー」

ようやく決着の着いた勝負にコナンが口を開く。

「つーか元太食いモンしかいってなかったじゃねーか」

「どうせ全部貴方の食べたいものなんでしょ」

図星だったのか照れたように口をとがらせた元太はムウと唸る。

「そんなに言うならお前等もやって見ろよ、意外と難しいんだぞ！？」

ムキになって言う元太にコナンはちらと哀を見る

「ほー…だってよ灰原あ？じゃあやってみようぜ！」

「え？」

「んじゃ、歩美からなー」

「は？ちよ、」

戸惑う哀を横目に第二ラウンド開始。

「じゃあ、りんご、次光彦くんだよ」

「あ、はい、ゴボウ、ほら元太くんですよ」

「うなじゅー！！」

「即答かよ…宇宙。ん、灰原」

「……ウイルス」

「す、す、スギ！」

「ぎ、銀河」

「がー？がー…がんもどき！」

「あー帰巢本能」

「ウル第三王朝」

「ウーロン茶！！」

「や、ですよね、や…屋根！」

「焼き魚！」

「ナイメーヘンの和約」

「クストツツアーノヴァラの戦い」

「…」

「…なんかお二人とも妙に単語が小難しい気が…」

恐る恐る光彦が中断すると、

「あら、そうでもないわよ」

「あ？それでもねーよ」

と返事が返ってくる。

「あーなんだっけ？い？家数人馬改帳」

「ウロキナーゼ」

「全身性エリテマトーデス」

「スミルナ」

「…」

「……」

もはや小学生（本当の）三人そっちのけで次々と言葉を紡ぐ二人に本人たちも流石に不毛さを感じたのか、コナンが口をつぐむ。そしてフツと笑い肩をすくめた。

「……なあ灰原？こりゃ一生終わらねーぜ、」

「全然終わりの見えない勝負なんて不毛よね、ええ、やめましょう」

「うおっとアブナイ水たまりだ」

「大丈夫？」

「無事だぜ心配アリガトウ」

「運動神経が良くて羨ましいわ」

「わははそーでもねえさ」

「……」

「……」

横に並んで応酬していた二人が再び口をつぐみ、ちらと視線だけ交わし合う。

「さっきから偶然だけど会話がしりとりを継続してるわね、偶然だけど」

「どーしてだろうな俺は完璧偶然だからなあ」

「あら、どんな偶然かしらしりとりで負けたくないんでしょう？いい加減大人になりなさい」

「いやいや灰原サン俺の文頭がオメーの文尾に重なるのは偶然だ」「だったらあたしも偶然よ？」

「——お前ら……」
「二人とも……」

「」「負けず嫌い……」

「だね」

「ですね」

「だな」

別れる場所に着いても気づかずにやりとりを続ける二人を見て、三人が呆れるように声を揃えたのは、言うまでもない。

Fin?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7859e/>

戯れ

2010年11月27日15時05分発行